

みなさん、こんにちは。

1月20日は大寒、1年で最も寒い時期のはずですが。

「センター試験」が行われるこの時期、例年なら朝早くから雪のちらつく中を試験会場に向かう受験生の姿がニュースで流れますが、今年はとって暖かい日が続いています。

1. 学社融合授業 鳥羽小学校3年生

1月19日(金)、鳥羽小学校の3年生101名が昭和なつかし博覧会を見学し、「昔のくらしにタイムスリップ」と題した学習を展開しました。各グループで物のねだん、学校の様子、道具、遊びなどのテーマを決めて、ボランティアさんにむかしの話や道具の使い方について質問し、今のくらしや道具と比べてみました。



教科書に出てくる道具のコーナー



ボランティアさんも割烹着を着て説明



リコーダーの演奏と合唱も

学習の締めくくりにはロビーでリコーダーによる「エーデルワイス」を演奏し、「ふるさと」を合唱しました。館内に響き渡る子どもたちの歌声に観覧中の方々も思わず拍手をされていました。館所蔵の足踏みオルガンで伴奏した上野有香さん「緊張したけれども上手く弾けました」と話し、古川綾華さんは「楽しかったけれど、ちょっと難しかった」と話してくれました。来週1月23日(火)は林小学校の学社融合授業があります。

2. ワークショップ「ガリ版印刷体験」ガリガリと文字を刻む音がなつかしい

1月20日(土)は安藤信義さんを講師に迎え、30名が「ガリ版印刷」を体験しました。まず、安藤さんからガリ版の歴史や仕組みについて説明を受け、謄写やすりの上にロウ原紙を乗せ、鉄筆を握って、一文字一文字思い思いの言葉や感想を刻んでいきました。文字を刻んだ原紙ができあがると安藤さんが一人一人の原稿を普段使っている謄写版で印刷してくれました。なつかしいインクのおいしが広がり、いつの間にか会場には見学の人の輪ができあがっていました。

ガリ版の音が聞きたいと参加した瀧川江美子さん(太寺)は「昭和30年ごろ理科室で先生が印刷していた様子を思い出しました」と感慨深げ。尼崎から来た土井根悠太くん(武庫庄小3年)は「ガリガリという音がおもしろかった」と話してくれました。

お気に入りの短歌を刻んだ方、マンガを描いた小学生、印刷まで体験したいとエプロン持参で参加したのは京都教育大の東根麻美さん。神戸の小学校に昭和41年まで勤めていたという福井香代子さんは「50年ぶりに鉄筆を握りました。放課後は毎日のように宿題のガリ版を切っていました。なつかしい鉄筆の音をもう一度聞けてうれしかった」と笑顔で話してくれました。



ガリガリという音に笑みが



一文字ずつ慎重に



印刷する安藤さん

文字を書くことが少なくなり、パソコンで文字を打ち込むことが多い今日この頃ですが、実際にガリを切ってみると形を整える難しさがわかり、一文字一文字を集中して刻むようになります。人の手が生み出したガリ版の文化には、文字に対する真摯な姿勢と心のあたたかさのようなものがあるのではないのでしょうか。「ガリ切り3年、刷り8年。文化として今後も残したい」と安藤さんは話してくれました。